

# 野呂文学への誘い

## 季刊 諫早通信

デジタル版28号  
(通巻80号)  
2024年11月7日  
野呂邦暢  
顕彰委員会発行

野呂さんが文学者仲間に出していた手紙は、「諫早通信」といわれていた。



### 野呂邦暢の略歴

本名 納所邦暢 昭和十二年（一九三七年）生。  
昭和三十一年 諫早高校卒。  
昭和四十九年 第七十回芥川賞受賞。  
昭和五十五年五月七日 享年四十二歳で急逝。



▲野呂文学碑前  
「菖蒲忌」献花のお手伝い  
(鎮西学院高校インターアクトクラブ)



▶こども食堂ボランティア

## 「菖蒲忌」に参加して思うこと

高校生と共に

末吉幸子



鎮西学院高校インターアクトクラブは、一九八六年より菖蒲忌に参加し、式典補助や作品奉読などの役割を与えていただいております。参加させていただいた生徒は、それぞれの持ち場でお褒めの言葉をいただいたり、「ありがとう」と言っていたりする経験を通して、奉仕の喜びを感じています。また、朗読される野呂作品の流れるような美しい文章を耳にし、野呂邦暢の作品をはじめとする様々な文学作品や朗読することに興味を持ち始める生徒も少なくありません。

平成三十年に改訂された教育指導要領では、小説や古典などが必修科目から外れることとなりました。私自身は地歴公民科の教員であるため、現場の実態には疎いものの、文学に触れる喜びや感動を得る機会が減ってしまうことを非常に残念なことと感じています。自分自身を含め、学生は教科書を通じて、普段図書館や書店で手に取らないような作品や作家に接する機会を得ていました。また、近年、SNSやAIの発達に伴って、多くの子供たちは自らの興味・関心のあつ分野についての知識のみを得るようになったため、様々な文学作品との「出会い」の機会を大幅に減している現状があります。

また、大学入学試験の狙いが膨大な資料を読み取り、背景の問題点を発掘する能力など、現代の経済競争に対応する力が重んじられるあまり、人間同士の共感や思いやり、支え合いといった力を養成する小説部門が教科書から消えていくのは寂しい限りです。

そのような中で、毎年の式典参加を通じて、プロによる朗読に触れるること、同年代の学生が素晴らしい文学作品を生み出していること、また、郷土諫早の風土や自然の美しさに野呂邦暢の文章を通じて気づかされること、多くの刺激を与えていただいていることは貴重な体験であると言えます。子供たちを取り巻く状況は誰にも予測ができません。速さで変化をしていきますが、このような素晴らしい「出会い」を与えていただいていることに感謝し、今後も携わらせていただければと考えております。

(鎮西学院高校インターアクトクラブ顧問)

へ対談 原爆と表現 野呂邦暢・山田かんVより

(一九七五、八月九日 毎日新聞夕刊)

随筆コレクション「兵士の報酬(みずず書房)」所収

三十回目の長崎原爆忌。体験の伝達、継承は可能か、文学は原爆を表現しうるか、という重い問いかけのある中で、野呂邦暢は山田かん氏と「原爆と表現」のテーマで対談した。

林京子氏がこの七月に「祭りの場」で第七十三回芥川賞を受賞したことも踏まえて語られている。

## 原爆を意識した時

**野呂** 非常に重い主題だからたやすくは語れないところがあります。山田さんは被爆体験も持たれているし文献にもおもしろい。私が聞き役で話をすすめたいと思います。八月九日にはどこに？

**山田** 爆心地から直線距離で二・七キロの下西山町です。学徒動員の軍需工場から朝七時に徹夜業を終え、自宅に寝ていて、ちょうど目を覚ました時でした。屋内被爆です。旧制中学三年(十四歳)でしたね。

**野呂** 何が起こったと思ったんですか？

**山田** 瞬間的に「爆弾だ」というイメージを描いたのは確かです。しかし爆弾の質が何かまではむろんわかりません。

**野呂** 私は直前に長崎から諫早へ

疎開してたんですが、道路を長崎の方へ向いて歩いていたら一瞬間が一面に白く光った。もちろん新型爆弾ともわからない。その後、小、中学時代を通して原爆を改めて考えるなんて余りなかった。家族や親類に被爆者を持たなかったせいもありますが、通常爆弾と同質なもので戦争の延長という感じで格別区別もしてみなかった。特殊なものだと思ってしまうのは高校を出るところです。山田さんの場合、どんな時間的曲折を経て意識したのですか。

**山田** 常に悲惨だなあ、ということでした。その後焼け跡にバラックが建ち市場や喫茶店ができればじめます。すると僕には一つの好みがあつて、目的もなくブラブラ出かけるクセがあつた。けれど町の方へは足が向かない。まだ原野

だった浦上天主堂あたりへ自然と向くわけです。被爆した原野だからというのでもありません。自分の心の中の荒涼と、地理的な浦上の荒涼がピタッと重なって慰められる。歩くこと自体にロマンチズムを感じるみたいだった。じゃ、どうして被爆が自分の中で問題になりはじめたかというところ、そのころ、石田雅子さんと永井隆さんの原爆記が出ます。ところが両方とも僕にはまどろっこしくて非常に着飾ったことばに思える。それに対する反発の逆作用みたいなふうにならなうに被爆が問題化してきます。つまり被爆をどう受け止めるか、自分の中に出てくるまで長い時間を要した気がしますね。

**野呂** 石田さん、永井さんの原爆記とは自分は違うものを見ている、原爆の本当の姿を見ている、という確信ですか？

**山田** いいえ、屋内被爆ですから当然爆心地付近の被爆者と私では身体的直接さ、被爆の様相が違います。違うなりに、表現となると体験の位相とは別のものじゃないかということですね。

**野呂** 八月九日は一日限りで消えるにしろ、山田さんが被爆したと

いう歴史というか青春は、ずっと持続しているわけですね。そこでこの三十年の経過の中で山田さんの体験は一貫して同じ形であったのか、それとも変わってきたのかどうか。

**山田** 変わりつつありますね。最初セツナ的に原爆を受け止めてたころと、二、三十年たつての見方がありますね。本当に見えたか見えないか、というよりむしろ膜をかぶって来た感じ。

## 「偶然」が残した生

**山田** 今度は野呂さんにかがいたい。先刻、高校時代を過ぎて関心を抱いたとおっしゃったけれど、何があつたのですか？

**野呂** はじめは原爆を戦争の延長戦でしかとらえていなかった。ところが、破壊力ひとつとっても二トロの破壊と原子による破壊の違いは、人類史上でも画期的なことですね。それに戦後日本の平和と繁栄です。二百五十万人の戦争犠牲者、それも戦闘に参加しなかった無辜(むこ)の人たちの血であがなわれただけですね。その最も端的なわたしが広島と長崎だった。それに気づいたとき、ひよっとしたら自

分も死んでいたことに思い至ります。

**山田** 危機一髪で被爆をのがれたことや、亡くなった級友への負い目ですか？

**野呂** いえ、子供のころだから罪の意識はないわけです。むしろ自分が諫早へ危うく疎開できたのは無数の偶然的集積だったんですよ。祖父の死とかヤミトラックの都合が早目についたとか……。だから戦後私が生きているのは仮の姿ですね。偶然がなかったら、爆心から一キロ以内の岩川町で黒コゲになつてたでしょうから。原爆記録を読んでいると、自分の身近な級友たちではなかったかと思う。長崎は身につまされるのですよ。

**山田** 身近な級友の死に方、その気がかりは私もやはり今でも残っています。小学校の時好きだった一人の少女がいたんですが、林さんの「祭りの場」を読んでいると、その少女と林さんも同じ年ごろ、同じ長崎県立高女なんですね。ひよっとしたらあの少女の死のことが書かれているのではないかと、面影をさぐっているんですよ。出てこなかったんで幸いだったけど、たくさんの人が死ぬ状況が書かれている。その中であの少

女も死んだのだろうと納得できるわけです。

### 三十年という時間

**野呂** 高校一年のとき原爆映画「ひろしま」があり、みんな感動していたが、僕はこわくて見たくなかった。記憶に生々しいイメージがあつて、見るにたえなかったですね。ところが三十年たった今なら、慣れというか、ゆとりが出てきて見られる。その三十年という時間の意味は何でしょうね。

**山田** 自分自身の体験の質そのものが許されているという感じがあのじやないかな。

**野呂** 何に対して。

**山田** 結局、生きてきたこと、死を免れて生きてきたことの価値を、自分自身に許容したことじゃないのかな。

**野呂** つまり三十年たたないと、見えてこないものもあるということですね。長い時間たつてから初めて見えてくるものはどんなものですか。

**山田** たとえば、林さんの「祭りの場」で言えば、学徒出陣の際の踊りの輪が一瞬かき消えてしまふ。そういうものが見えてきた。

**野呂** 生々しい残酷なイメージを書くことが出来るようになったのは、生々しさが時間で薄められてくるのですね。

**山田** 生々しさが薄められるというより、精神的に書くことが出来るようになったことですね。二十年前、二十五年前、その表現を頭の中にのぼせ得たかどうかですね。それが三十年たつて記録を掘り起こせという。戦争や原爆はそれだけの時間の経過がないとどうにもならないのでしょうかね。

**野呂** 歴史家に言わせると、事件後五十年は扱えないという。それだけたたないと本当のことはわからないからだそうですが五十年たつと生々しさは消えてしまふ。ところが三十年たつて長崎の原爆を書いた作品が社会的影響力の大きい文学賞を与えられることになった。「祭りの場」が受賞した意味に、僕は戦後三十年の時間を強く感じるんです。

### 方言が生む迫力

**野呂** また文学に戻りますが、例えば「嵐が丘」なんて、特別地方を書こうと思つたわけではないのに、地方がすばらしく描かれてい

る。原爆、被爆空間だつて地方なんです。それを書けば地方が色濃くなる。リアルに書けたら普遍性が加わりますよ。

**山田** 二十年代の広島のものを読んでみると、書かれた被爆者が標準語でしゃべっている。そこが普遍性をもてないネックになつてますね。地方、中央の呪縛からはずれて土地ことばで語る。僕もいまやつとそこで書けるようになった。

**野呂** 林さんも言つてました。あれを書いていて長崎弁が自然と出てきた。標準語で書くとどうもおかしい、と。そこまでくるには、被爆後のつらい苦しい三十年があつてのことでしょう。逆説的で興味深いですね。

**山田** 必ずしも原爆、被爆でなくても通常爆弾でもいい、自己体験の深いところで受け止めることです。二十年代にはこれがなかった。「祭りの場」はそれが地方語で書かれている。そのことが迫ってくると思うのですよ。

**野呂** 三十年かからないと、被爆の表現の中に方言を獲得できなかったとは、象徴的だし、長いですね。

## 小説に見る

諫目を描いた野呂の人の  
言き下によろテッサン ②9

黄色・柿色・茶色、一定のへだたりを置いて

まっさきに現れたのは黄色である。

黄色の次に柿色が、その次に茶色が一定のへだたりを

おいて続く。

堤防の上に五つの点がならんだ。

堤防は田圃のあぜにいる私の目と同じ高さである。点は羽をひろげた蝶のかたちに似ている。河口から朝の満ち潮にのってさかのぼってくる漁船の帆が、その上半分を堤防のへりにのぞかせているのである。

ゆつくりとすべるように動く。

野呂邦暢小説集成5 「諫早菖蒲日記」冒頭 一九七七年 四十歳作

### 何を見たいか⑩ 無垢なる情緒

庭の楊梅ヤマモの木の下に今年も水引草の花が咲いた。うす緑の葉叢の中に赤味がかった小さな朱の色がてんでんと間合をとって咲いている。絶妙なへだたりを置き静かに太古から日本の豊かな情緒を放ちながらほほえむかのように歌を唄っている。

「諫早菖蒲日記」のはじまりはやまごころをくすぐる無垢な美しさがある。

菖蒲日記には、水引草は現れてないが漁船の帆の染められた色はならんでゆつくりとすべるように潮にのってさかのぼってくる。

心に染みる象徴的映像として描かれている。そこに色彩が見える。黄、柿色、茶色とひらがなの助詞でつながりながら視覚的に抽出され、絵を見ようである。

水引草の情感も漁船の旗の蝶のような姿も、そこから発してくる波動のような、音楽にも似た映像として伝わってくる。

無垢なる世界はその基が二千年前の縄文時代の豊かさに通じ合っているように思えてならない。干潟のもつ豊かさである。

読み手の心に響かせ、今というときに咲かせてくれる。

読み手はこれと響きあい、観賞するよろこびで数万年の連なりの本物の豊かさを与えられる。

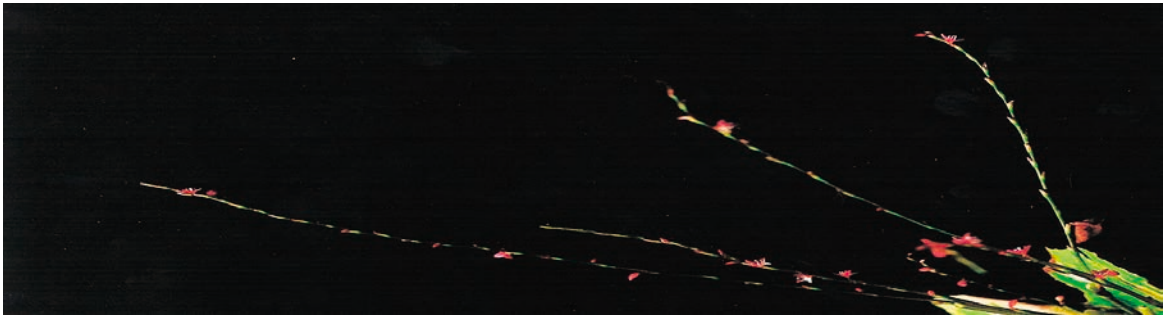
上文から三行後に「先頭の舟が帆柱にかかげた大漁旗を認めてどよめいている事だろう。」とつづく。

豊かな有明海と大漁の豊かさが漁民はじめ人々にそして家畜や犬や猫や動物まで歡びがいきわたるのを野呂の五感は楽しんでる。

(文) 野呂顕彰会委員 山下

# 私たちを取り巻く波動

波動はあらゆるものから出ている。私たちが芸術作品に感動する時そこからも波動が出ていて、感動と波動の関係についてチャットGPTに尋ねると、以下のように回答があった。



てんてんと赤い花をつけるみずひきの花

写真：三軌会 会員 濱辺耕作

感動と波動の関係について考えると、まず「感動」とは、強い感情や印象を受けたときの心理的な反応を指します。これは音楽、芸術、文学、あるいは人との交流など、さまざまな体験を通じて引き起こされることがあります。

一方、「波動」は物理的な概念で、エネルギーや情報が空間を通じて伝わる様子を表します。音波や光波など、さまざまな形で存在します。

感動と波動の関係については、以下のような観点から考えることができます。

1. 感情の波動：感動は、私たちの感情や心理状態に強く影響を与えます。ポジティブな感動（喜びや感謝など）は、周囲に良いエネルギーを放出し、波動を高めることがあります。一方、ネガティブな感動（悲しみや怒りなど）は、重い波動を生むことがあります。このように、感情は波動として表現され、他者にも影響を与えることがあります。

2. 共鳴：音楽やアートなどの表現は、特定の波動を持っています。これらの作品が人々の心に響くと、共鳴が生じ、感動を引き起こすことがあります。たとえば、特定のメロディーやリズムが聴衆の感情に訴えかけ、深い感動を生むことがあります。

3. コミュニケーション：人間同士のコミュニケーションにおいても、言葉だけでなく、声のトーンや身体の動きなどが波動として伝わります。これにより、感動的な瞬間が生まれることがあります。たとえば、感情を込めた話し方や表情は、相手に強い印象を与え、感動を引き起こす要因となります。

4. エネルギーの交流：感動は、他者とのエネルギーの交流を通じて生まれることがあります。共感や理解を通じて、私たちは他者の感情に触れ、感動を共有することができます。このような交流は、波動の変化を伴い、より深い感情的なつながりを生むことがあります。

このように、感動と波動は相互に関連し合い、私たちの体験や人間関係に深い影響を与えています。

とくに 2. 共鳴が生じ、感動が生まれる。本文の堤防の上の五つの点がならば、ゆっくりとすべるように動くという描写はそこに立ち現れる江戸末期の諫早湾から登ってくる漁船のたたずまいが実在する無垢なる光として私を捉える。その光景は見あかぬ眺めで楽しませてくれる。野呂のこころの動きが家から100メートルも歩まぬ場所から景色に縄文時代からつながる永遠の無垢なる世界を見ていたことを証明している。

(文 野呂顕彰会委員 山下秀人)

## 虹

野呂邦暢

浦上駅の表口近くに小さな遊園地がある。諫早から列車で長崎へ行くとき、浦上駅へ入る直前、車窓から見える。この頃は長崎へ出かけるのにバスを利用して一、二年列車に乗りたくないから遊園地が今もあるかどうか心もとない。町の変わり様は急速だから、しばらく見ないうちになくなっていくか知れたものではないという気がする。

私の家はこの遊園地にかつてあった。岩川町四十番地というのが正しい所番地である。七歳の記憶では岩川町はかなり広がったように思うのだが、実際は小さな遊園地におさまるほどのちっぽけな町にすぎなかったわけだ。私の一家は昭和二十年二月に諫早へ疎開した。その後、岩川町の人々とは一度も会っていない。爆心地から一キロ以内の距離であるから、町の人口は大半なくなっただけだ。隣家のAさんは旅行中の御主人だけたすかたて家族は全員爆死した。奥さんと二人の娘さんである。私の一家はAさんと親しかった。Aさんの奥さんは裏口から醬油を借りに見えたり、塩を借りに私の母がAさん方へ行ったり、当時はそうやって乏しい調味料をゆうずうし合うのがごく当たり前の習慣になっていた。

「奥さん、直接弾はおそろしかねえ」  
Aさんの奥さんはいった。防空演習があつて、隣り組の奥さん連中は在郷軍人から爆弾や焼夷弾の講義をうけた。岩川町の電車通りに面して今は五階建のA

パートがたつている所で、その頃しばしば焼夷弾を消す訓練が行なわれた。模擬焼夷弾の上に水でぬらしたムシロを一人ずつ駆け寄ってほうり投げ、砂をかぶせるのが消火法であつたと思う。梯子を軒にかけて屋根に落ちた焼夷弾を消す訓練もおこなわれた。梯子に五、六人が足をかけてまたがり下からのバケツをリレー式に上へ手渡して水をかけるのである。またこういう訓練もあつた。

爆弾投下時に身をまもるため、号令いっか腹這いになって両手の指で目と耳をふさぎ、口をあける。平たくうつぶせになつておれば破片と爆風をよけることができる、と戦場からの帰還軍人は説明した。しかし、直撃弾を見舞われたらこれはどうしようもない……。

Aさんの奥さんは直撃弾を直接弾とまぢがえたわけだが、どちらも同じようなものだ。

「退避、退避……」

かん高い声で叫びながら岩川町の路上を走りまわつていた奥さん連中の姿が目にかぶ。魔法使いがかぶるような防空頭巾、アラビア人がはくようなモンペ、子供の目には彼女たちの姿は充分に童話的であり得た。晴れた日でも消火訓練の的にされた軒端からは雨のように水が流れ落ち、小型の虹がかかったことがある。

（「炮氓」一九七五・七）

（炮氓（ほうぼう）は山田かん氏の同人誌  
本文は随筆コレクション「兵士の報酬」  
（みすず書房）による

## 編集後記

「菖蒲忌」は、受付、献花の準備・補佐、併せて作品朗読や司会まで、市内の高校生に支えられている。今号では、毎年多くの生徒を引率指導下さっている、鎮西学院高校インターアクトルクラブ顧問、末吉幸子さんに寄稿頂きました。昨今の高校生事情から文学作品に対する思いまで書いて下さいました。

野呂邦暢の新聞掲載エッセイ「窓の眺め」は前号で終了です。改めて読んで頂きたいエッセイ等掲載していく予定です。山田かん氏との対談は前号を受けて、原爆と表現について野呂の思いが語られています、お読みください。

（編集長 古賀順子）

※印刷版「諫早通信」一〇五十二号のアーカイブ閲覧が可能です。ご利用下さい。

編集長 古賀 順子

編集委員 平野 博 山下 秀人 柴田 元信

野呂邦暢顕彰委員会（諫早市芸術文化連盟内）

〒八五四一〇〇一四 諫早市東小路町一〇一五

電話（〇九五七）三二一〇三 FAX（〇九五七）三二一〇六七

デジタルデータ制作 諫早印刷株

〒八五四一〇〇〇一 諫早市福田町二〇一六

電話（〇九五七）三二一三五〇 FAX（〇九五七）三二一三五一

季刊「諫早通信」は二月・五月・八月・十一月に配信します。

次号は二月七日の予定です。